

表統領メッセージ

(天理時報 立教183年3月8日号より)

新型コロナウイルスの感染拡大が世界的に進行しています。天理教教会本部では、こうした事態の終息はもとより、罹患された方々の身上平癒とともに、さまざまな困難に直面しておられる方々の、一日も早い平穏な日常への回復と、社会的・経済的な混乱の収まりを願って、3月3日正午、本部神殿でお願いづとめを勤めさせていただきました。

それぞれの教会やようぼく・信者におかれましても、日々のおつとめの中で同様に記念してくださっていることと存じます。

御教えによると、かつて「流行り病」といわれた感染症は、神の残念の現れであり、人間創造の元の思召を知り、早く心を入れ替えて陽気づくめの心になってもらいたいとの親心の現れであると示されています。

いま世界では、内乱、紛争、対立の激化など緊迫の度を深めています。一方、教内を顧みますと、たすけ一条を急き込まれる親神様・教祖に、残念な思い、もどかしい思いをお掛けしてはいないかと、大変申し訳ない思いでございます。

新型コロナウイルスの感染拡大が一日も早く収まり、病んでいる方々にたすかっただけきましますよう、一心にお願いするとともに、一層おたすけに励み、陽気ぐらしへの歩みを速めて、親神様・教祖にお喜びいただけるよう、全教の足並みを揃えて、一手一つにつとめさせていただきたいと思ひます。

国の内外では、官民を挙げて、感染症の拡大防止へのさまざまな対策が講じられています。その取り組みに歩調を合わせ、社会の不安や心配に配慮しながら、教内各位においても、慎重な振る舞いを心がけていただくようお願いいたします。そして、まず私たちお道の者が明るい心を持って、社会の人々と共に、この困難を乗り越えていきたいと存じます。

今回の世界的な事情を、私たちが大きく成人させていただく節と捉え、この大節から芽を吹くご守護をいただきたいと念願しています。

立教183年3月3日

表統領 中田善亮

〈教会本部からのお知らせ〉 教会本部 3月月次祭および春季霊祭について

ただいまの新型コロナウイルス感染拡大を防止する社会全体の取り組みを踏まえて、教会本部3月の月次祭および春季霊祭は、参拝者の神殿、教祖殿、祖霊殿への入場をご遠慮いただき、その代表として直属教会長、教区長の参拝のみで勤めさせていただくことにいたします。教会長はじめ、ようぼく・信者の皆様におかれましては、本部3月月次祭への参拝をお控えいただき、当日は、各教会・布教所・信者詰所、自宅などから遥拝(ようはい)されますようお願いいたします。なお、本部月次祭では、常と変わらず御教え通りに「かぐら・てをどり」を勤めさせていただき、親神様のたいなるご守護に御礼申し上げるとともに、世界中の人々のたすかりと事態の収まりを祈念いたします。全教のようぼく・信者の皆様には、それぞれの場所からおちばに心を寄せて、共々に一手一つに祈念して下さるようお願いいたします。

立教183年3月13日

天理教教会本部

3月26日の月次祭および27日の春季霊祭におきましては、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、一般参拝者の殿内、回廊、境内地での参拝をご遠慮ください。両日とも祭典終了後まで、お茶所、インフォメーションセンター、西地下、スロープ昇降口、殿内エレベーターのご利用はできません。なお、お供え物につきましては、神殿西御守所階下ならびに教祖殿御守所にて、それぞれ受け付けております。また、3月25日・26日・27日の「説教・神殿おたすけ」はございません。ご理解の程よろしくようお願いいたします。

立教183年3月16日

天理教教会本部

華(はな)のある人 (「だけど 有難い ～幸せの条件～」 道友社発行より)

テレビ、映画、舞台、あるいは野球やサッカーといったスポーツの世界などを見ると、「華のある人」というのはいるものですね。その人がやって来ると周り迄パッと明るくなるような、なんとも言えない魅力がある。そういう人には、人の心が寄ります。人の心が寄るから、物も寄ります。

たとえば、アテネオリンピックで野球競技の日本代表監督を務めた長嶋茂雄さんがそうです。巨人ファンでなくても、長嶋ファンだという人は多いですね

それだけ魅力があるからでしょう。途中で病気になってアテネへ行けない状態になったのに、監督は変わりませんでした。普通なら、そのまま続けることはあり得なかったと思いますが、周囲から文句も出なかった。まさに「華のある人」です。みんなが「長嶋さんなら」と認めてしまう素晴らしさがあるのです。

私は、道友社発行の『すきっと』という雑誌が「華」という特集を組んだ際に、フジテレビの元プロデューサー・横澤彪さんの話を聞いたことがあります。昔、「オレたちひょうきん族」というバラエティー番組をプロデュースしていた人です。ビートたけしや明石家さんまが出演していて、大変人気がありました。その横澤さんが、こう言うのです。

「華のある人というのは、まず何より『陽気な人』である。『明るい人』である。暗い人には華はない。また、どんなに苦労していても、苦労が顔に出る人には華はない。役者でも、苦労が顔に出ると華はないんです、あとは下り坂です」また、こうも言っていました。

「華のある人というのは、人を喜ばせたいという気持ちを持っている人である」

たとえば、落語家の初代・林家三平師匠は、明るく陽気で、人を喜ばせる心が人一倍あったそうです。ネタが受けないときは、草履(ぞうり)を投げてでも受けたいお客さんに喜んでもらいたい。笑ってもらえるなら、なんでもするというのが、あの三平師匠だった。師匠がいるだけで、みんなうれしくて楽しくて、そばへ寄っていったということです。

この話を聞いて思いました。そんな話なら、わざわざ横澤さん取材しに行かなくても、お道の人こそ「華のある人」のはずです。親神様を信じているのですから、当然、明るく陽気な心になれますね。そして、お道では「人をたすける」ことを学びますから、当然、人に喜んでもらいたい、たすかってもらいたいという心を持っているのです。

では、お道を信仰してさえいれば良いのか。そうではありませんね。教えを実行しないと、人の心も物も寄るような魅力のある人にはなれません。

「信じているが、にをいがけできない」「人をたすけるなんて、おこがましい」と言う人がいます。しかし、それは考えようによっては、災害や事故のときに、自分がたすかって「ああ良かった。でも、人をたすけるなんて気持ちにはなれない」と言っているようなものです。

人のことを思いやれない、考えられないというのは、たすかりにくい姿です。犯罪を起こす人たちは、たいてい後のことは考えていません。人の痛みに気がつけば、そんなことはできないのです。

私たちお互いは、教えを実行させていただいて、

「あの人がいると、うれしくなるな」「あの人に会って、話が聞きたいな」「あの人の話を聞くと、何か明るい気持ちになれるな」

そんな華のある人、魅力ある人を目指したいものです。

立教百六十七年(平成十六年)十一月

